

ひかりのこ

3月園便り
聖ミカエル幼稚園
2015年2月20日

「聖書のお話し」

私たちの幼稚園は、毎週月曜日に礼拝堂で、みんなで礼拝をします。その中で先生たちが順番に聖書のお話をし、子ども達は聞いたお話を家に帰ってお母さんやお父さんに教えて、親御さんたちはそれをカード帳の下のメモ欄に書くことになっています。小さい子ども達が10分くらいのお話を実によく聞いて、正確に親御さんに伝えていきます。

8月に私が『十字架』について、お話したことがありました。「十字架はね、縦の線が私たちと神様をつなぐ線、横の線は人間と人間をつなぐ線だよ。」(ここで、縦がとっても長くて、横がとっても短い十字架の絵を見せて)「この人は神様のことはとっても大事にしているけど、友達や家族のことを大事にしていないんだよ。」(次に縦がとても短く、横がとても長い十字架を見せて)「これはお友達は大切にしてくるけど、神様のことを忘れちゃっている人。」(次に縦も横も短い十字架の絵を出すと、子ども達がげらげら笑う。)
「これはもう、神様もお友達にも大切にしない人！」・・・こんなお話をしました。このお話をした翌日、4歳になったばかりの男の子が、次のようにノートに書いてもらってきました。

『さいしょ、おおきいじゅうじかで、ともだちとケンカしたらちいさいじゅうじかになって、めっちゃうこときかなかったら、ただのほんもののばってんになる。こころのなかにじゅうじかがあるって、えんちようせんせいと言っていたから。だからずっとだいじにしている。』

本当にまっすぐに耳と心を私に向けてお話を聞いてくれたんだ、そう思うと胸が熱くなる思いでした。正に、神様に一番近いのはこの子どもたちなのだなあ、と感じます。それと同時に、キリスト教保育の中でのこのような教育活動が、知的な力と、正しい心の両方を育むことができることも実感します。お話を耳で聞いて、お家に帰るまで覚えていて、それを自分の言葉で伝えることができる、頭の中の色々な部分を上手に使っています。そして、『だからずっと大事にしている』…。このお子さんの心の中にきれいな形をした十字架がすくとんと入ったんだなあ、と感じます。

先日は「放蕩息子」のお話を、今度は素話でしましたが、もうすぐ6歳になる男の子はお母さんに小さい文字で、9行もの大作を書いてもらっていました。ほとんどお話の内容を正確に伝えていきます。素晴らしい力です。先生たちに聞くとほかのお子さんも、よくお話が聞いていたそうです。お家でお子さんのお話を根気強く聞いて書き留めてくださる、親御さんにも感謝いたします。これからも、このキャッチボールを大切にしたいと思います。

園長 渡部良子

月主題：わすれない

- ・新しい生活へ安心して向かおうとする
- ・神さまの守りの中で、大きくなったことを感謝する
- ・震災にあった人々のことを覚えて祈る

キリスト教保育

「灰の水曜日」

先日18日、教会は「灰の水曜日」という日を迎えました。今年はその日から4月5日の復活祭（イースター）までの日曜日を除く40日間を、教会は特別な時（レント）として過ごします。聖公会では大斎節、他の教会では受難節と呼ぶこともあります。イエス・キリストは最後の時、活動の拠点としていたガリラヤ地方を後にして、政治の中枢であるエルサレムに旅立ちました。そこで十字架の死を遂げるのですが、その歩みを、私たちも時と場所を越えて共にする大切な期間なのです。その始まりである「灰の水曜日」は、初代教会では全身に灰をまとい、自分が灰のように無に等しい存在であることを思い起こすのです。今でも教会や人によってはいつもより節制をしたり、憤み深く、静かに過ごそうとする習慣があります。この期間、肉を食べたり、どんちゃん騒ぎを遠慮する教会の文化圏では、これが始まる前に大いに楽しんでおこうということで、「カーニバル」を行います。

節制も肉を絶つのもいいのですが、大切なことは「いのち」について思いを深めることです。いのちはどこから来たのか、いのちに終わりはあるのか、なぜいのちは大切なのか、自分のいのちは誰のものか。簡単に答えは出ませんが、良い絵本や書物、人のお話し、聖書など様々な方法で思い巡らしてみる機会です。

そういう時を経て、いのちへの気づきが頂点に達し、大きな喜びにいたるのが復活祭です。聖書は、復活こそが人間の苦しみや重荷が解き放たれる時であると教えています。これがあれば、これを信じさえすれば、何があっても自分は大丈夫といえる出来事です。この復活の春に、年長のこどもたちは幼稚園を旅立って行きます。神様のみ守りの中で、すばらしい未来を切り開いて欲しいと思います。残りわずかですが、3学期の幼稚園が守られますように。

チャブレン 司祭 下澤 昌